



冬の日五歌僊註解

全

中村俊定文庫

文庫 18

1009





小まん傳 小まん柳と云ふ侍部波會船山田の邊流例村  
昔北條氏家南佐規と云ふ三万貫を領せし頃酒色は長  
人をめす事仲は面々しき事ありしをいふに  
百貫の海をつくありし頃ありしに  
氏家よりいふ氏家いふに思ひてやそ百貫の海を甘くゆえり  
ちよらあひまの難を極ふ氏家かくの如く恩をかけるに後彼世を  
まゆきそむに松興と云ふ婦人初孫の奥女にれに世を結し  
松興と云ふまその四郎を國に誘ふ事華堵をうらまふるに  
柳を柱しし柳と云ふ世に小まん柳と云ふ  
身を柱しし柳と云ふ世に小まん柳と云ふ

附小伝

あは



Handwritten notes in Japanese at the top of the left page, including the characters "和" (Wa) and "紙" (Shi).

まきの口

村のふもと

あり





朝の日記  
朝の日記は或説にその朝の日記を記すに於て狂言と并ぶるべきに云ふ他は云ふ事  
あれは其の朝の日記に於て狂言と并ぶるべきに云ふ他は云ふ事  
代々の朝の日記に於て狂言と并ぶるべきに云ふ他は云ふ事  
あれは其の朝の日記に於て狂言と并ぶるべきに云ふ他は云ふ事

むし狂言の女士は國はあやま  
り石園あやまいゆきりり伝

狂句こか  
此舟は行きかほ州も  
芭蕉  
貞享二年甲子年狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の



狂言の二字謙謙の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の

冬の日  
あはれは八月と九月を狂  
言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の

望み長途のむよおし  
あはれは八月と九月を狂  
言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の

免るは徒はく  
あはれは八月と九月を狂  
言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の

あはれは徒はく  
あはれは八月と九月を狂  
言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の

むし狂言の女士  
あはれは八月と九月を狂  
言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の

石園あやまいゆきりり伝  
あはれは八月と九月を狂  
言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の

狂句こか  
あはれは八月と九月を狂  
言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の

狂

狂言の二字謙謙の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の

狂言の二字謙謙の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の  
詞はまじりて狂言の記りの白し狂言の二字謙謙の







八平の巻三... 全く難の... 師説し...

全く難の... 師説し... 借考... 先んて... 風の... 竹...

有海の水... 荷...

朝鮮のほ... 杜園

酒造... 有海... 朝鮮... 有海... 朝鮮... 有海... 朝鮮...

有海... 朝鮮... 有海... 朝鮮...

有海... 朝鮮... 有海... 朝鮮...

有海... 朝鮮... 有海... 朝鮮...

有海... 朝鮮... 有海... 朝鮮...



八中... 全... 備... 借...

有... 山... 野木

有... 荷...

有... 重...

朝鮮のほり... 杜園

日のちり... 正平

わ... 聖水

わ... 聖水

Handwritten notes at the top of the page.

Handwritten notes at the top of the page.











さかひ化——和のさりとる——仰し味あり

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木

鳥賊ハ多し其の國此ニシテ

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木

あられされ謎もとく 郭云 聖水

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木

秋水一斗 郭云 聖水

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木

日東の赤子白の坊の月を 見ん

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木

仲ノ木槿と 玉比 玉比 打 花

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木

月堂山の丸の扇

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木

大入ト註

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木

眞ノ菓 杜注

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木

わいの里あまういれ 里乃るむ なく 花

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木

下機の若のきわ牛は物

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木

世海りを取らば世のつらかりれと一子をわいにか

△古義協の併しナリ 史記魯世家：魯夷氏无雍無君臣序亦有決疑之下或以金石或以草木







主人を蝶に比喩し、蝶は其の身を腐らさず、唯秋也あり人亦るを、生をむきつりおひしとせしむる也  
聖 葉子てき河ぬの蝶の相おれそ 是並  
其の葉を流るるに、秋の暮りてを多葉を秋葉の葉を流るるに、  
其の葉を流るるに、秋の暮りてを多葉を秋葉の葉を流るるに、

△王の鳥より之を呼ぶ  
一ハののちあふもやん二新し又  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、

△秋ののけしき、  
一ハののちあふもやん二新し又  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、

桃花をきき自徳乃富正平

△此ののけしき、  
一ハののちあふもやん二新し又  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、

ふにたつる沙香の因懐わいしと 桔園

△橘園の自水は、  
一ハののちあふもやん二新し又  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、

鼻のさしはしり成只た子にかく 塾水

△鼻のさしはしり、  
一ハののちあふもやん二新し又  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、

床をさすく語通といとこなり 男 荷子

△床をさすく語通、  
一ハののちあふもやん二新し又  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、

縁さしはしりけは根このころり 塾水

△縁さしはしり、  
一ハののちあふもやん二新し又  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、  
物々れと二新の鳴りしと一ありし一説に、うらわの鳴りしと、



○胃の痛  
かき腹の痛  
痛の痛  
痛の痛

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

△肝二精  
△肝二精  
△肝二精

け月二白一章子して三三三の中  
おのよと形  
おのよと形  
おのよと形

痛をり  
痛をり  
痛をり

地  
地  
地

水  
水  
水

明  
明  
明

小  
小  
小

石  
石  
石

勢  
勢  
勢

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

危  
危  
危

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り

和り  
和り  
和り



櫛こころ餅はゆら福や曲のなる 花子

花子の売玉命とかりゆきとる目と一は花子ゆら福はし  
取きり風怪し解すゆきとる後條あり一は児女の歌をゆき

うきむすねに赤福とわ 芭蕉

解すゆき陰敷の赤福とえはちねの赤福をゆき  
世一白の仕とゆきけねく女の情をゆき

藤あうく指を指れ帯さひし 望水

藤あうくのさひうくるは藤のつゆとる  
さひうくるは藤のつゆとる

三線かんと不破のせき人 三又

ある寂莫の風怪なり赤き人すすめり不破の指をゆき  
赤き人すすめり不破の指をゆき

唇すくく舌濡ておとる其もとる 芭蕉

唇すくく舌濡ておとる其もとる  
唇すくく舌濡ておとる其もとる

いせりや二捺抜  
えきりや二捺抜

あき草葉の通作あけいなる又藤をゆき  
舟の揺る世 揺るは目同作舟揺る其もとるゆき

福さめく のさくも 七十一 杜國

赤白の忘却をゆきおとる福さめく  
世一忘るしゆきあめしゆき

奉加めゆは学しと定ら母あひ 三又

七十のむら成瀬は学しと定ら母あひ  
加ふは学しと定ら母あひ

い少川の傘の下舉りした 芭蕉

中山の傘一かきも傷ふは下  
えきりや二捺抜

蓮池の雪のま遊ふ夕やみち 杜國

蓮池の雪のま遊ふ夕やみち  
夕やみちの雪のま遊ふ夕やみち

夕やみちの雪のま遊ふ夕やみち  
夕やみちの雪のま遊ふ夕やみち

文 謝 謝 謝  
魚 魚 魚  
鳥 鳥 鳥

七十のむら成瀬は学しと定ら母あひ  
加ふは学しと定ら母あひ



△世に...  
○...  
△月...  
△月...  
△月...

たどに...  
唐特の...  
唐特の...  
唐特の...

志とぬきぬ...  
臨濟を...  
芭蕉

秋...  
芭蕉

悟道の...  
芭蕉

△二...  
△二...  
△二...

夜...  
芭蕉

秋...  
芭蕉

夜...  
芭蕉

御幸...  
芭蕉

三...  
芭蕉

前...  
芭蕉







蓋草トナリハ雅也  
飾ト云ハホキ

子孫の工目ハ雅也  
蓋草ト云ハホキ

矢子肩あはハ一笠前一發中  
まのりゆハかくらさしと  
本草綱目時珍曰母貝此草葉如鳳尾其根一本而  
衆枝母貝之俗鳳尾根名母貝  
ト云和名アルヲ夫婦ノ相生ヲ祝スト  
ヨハイ草ハエダ草ハ長延ナルモ故齡ノ延  
四時不凋ナル草工ハ上陽ノ飾ノ具ニ用工且一笠前  
一發中セリル又無シト云謂ハモロクヲ母貝ト云ハハシ

芭蕉

馬糞檢  
北面の出入り  
おーのり  
一乃のり

前草の蓋草をうらほす  
おーのり  
一乃のり  
必まき

馬糞檢

風の吹り

荷分

茶の湯者

茶の湯者

おーのり

正平

龍ツカシ

つひ

おーのり

龍ツカシ

燈籠

おーのり

つひ

おーのり

つひ

おーのり

つひ

おーのり







七拾段より下のものが

と場し是も又後徳和のゆきとて流布せしつゝ富家ありて  
毎年花修儀いあゆしとの花女子類の形多傳へて花見  
の興ありて是を中一島は早くと花見流布とす  
いひ傳へて後流布とす而も同様の様子を人々傳へ

又形萱 子み 白田 六反 杜小

△三洲園奇のせむせむの  
花見の節は二年ほど地もいとよみ無きものみ形すれを  
作りあはせしむるむらりの形を祖(か)り

うき 子に 鴨を 花ちりくと 芭蕉

鴨をとりて形すれを見ゆしつゝいふは長年あるまきし  
これい人の勿論を形せしむるむらりの形を祖(か)り

真直の馬乃 祇少いりや 聖水

是あハ白の走りとしつゝあよみ解は乃り後世に流布せし  
對付のむらり

あきつむや 矢判の 橋を ありと 杜國

△三洲園奇の日本  
第一の長橋二百八間  
矢判の名は昔日本武尊  
東征の時作矢奉りて  
後日田取の時命をとりてすれはるの區區も又ありて  
旅人の區區をりてすれはるの區區をりてすれはるの區區をりて

床屋 ぼりり ちりり ちりり ちりり

三品園奇の詠は床屋の形とて二庭中一は名はありて  
童子保の形焼失せりてさやまの村集の読客堂の形を求  
見ゆせしむるむらりの形を祖(か)り

子名 策列 長さの んん 雪水

子名加の形をいひて全く形をぬきしつゝ後水尾院の  
神形をいひて子名をいひてさやまの村集の形を求  
見ゆせしむるむらりの形を祖(か)り

日さ ちりり 刀賣の 年 二反

日さちりりの形をいひてさやまの村集の形を求  
見ゆせしむるむらりの形を祖(か)り

留の ね 国 の ちりり ちりり

留のねの形をいひてさやまの村集の形を求  
見ゆせしむるむらりの形を祖(か)り

△三洲園奇のせむせむの  
化し又多くは人の形とてさやまの村集の形を求  
見ゆせしむるむらりの形を祖(か)り

白氏文 竹屋 皇子 二反



























△此の詩は世に改作され  
たが又此の詩を  
……

西京の月を照つて解す月日の傳の西京と傳あり  
……梅子……梅子の影ひて梅子……梅子の影を  
の影を……梅子の影を……梅子の影を……

はるかなる赤き花の文は水

物に……の影……の影……の影……  
……の影……の影……の影……

宿の月と旦と飛流北意紀と 芭蕉

別冊の赤き花を……の影……の影……  
……の影……の影……の影……

そこの南京の地 翠

刀……の影……の影……の影……  
……の影……の影……の影……

東鑑 卷三十四 四月廿四日 大正十一年  
……

△佛は……の影……  
……の影……

いづれも誰ともさうぬ人の像 荷

その……の影……の影……の影……  
……の影……の影……の影……

源の影の根 芭蕉

……の影……の影……の影……  
……の影……の影……の影……

粥の影の根 芭蕉

……の影……の影……の影……  
……の影……の影……の影……

花の影の根 芭蕉

……の影……の影……の影……  
……の影……の影……の影……

心は……の影……の影……  
……の影……の影……の影……

祈り……の影……の影……  
……の影……の影……の影……

……



冬入ニクニ一障<sup>意</sup>下<sup>意</sup>して方解<sup>意</sup>すなほ<sup>意</sup>け<sup>意</sup>は<sup>意</sup>老<sup>意</sup>も<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>り<sup>意</sup>し  
 老<sup>意</sup>中<sup>意</sup>の<sup>意</sup>世<sup>意</sup>帯<sup>意</sup>と<sup>意</sup>し<sup>意</sup>つ<sup>意</sup>を<sup>意</sup>さ<sup>意</sup>る<sup>意</sup>や<sup>意</sup>中<sup>意</sup>に<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>る<sup>意</sup>老<sup>意</sup>の<sup>意</sup>物<sup>意</sup>も<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>り<sup>意</sup>し  
 月<sup>意</sup>の<sup>意</sup>桂<sup>意</sup>の<sup>意</sup>影<sup>意</sup>の<sup>意</sup>つ<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>む<sup>意</sup>と<sup>意</sup>ま<sup>意</sup>い<sup>意</sup>る<sup>意</sup>け<sup>意</sup>い<sup>意</sup>の<sup>意</sup>む<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>し<sup>意</sup>と<sup>意</sup>く  
 雜<sup>意</sup>ニ<sup>意</sup>夕<sup>意</sup>後<sup>意</sup>身<sup>意</sup>く<sup>意</sup>ゆ<sup>意</sup>け<sup>意</sup>り<sup>意</sup>海<sup>意</sup>は<sup>意</sup>意<sup>意</sup>の<sup>意</sup>白<sup>意</sup>し

田家眺望

△四時<sup>意</sup>の<sup>意</sup>時<sup>意</sup>り<sup>意</sup>交<sup>意</sup>相<sup>意</sup>を<sup>意</sup>る<sup>意</sup>て<sup>意</sup>す<sup>意</sup>  
 ○け<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>鶴<sup>意</sup>ト<sup>意</sup>り<sup>意</sup>て<sup>意</sup>る<sup>意</sup>説<sup>意</sup>  
 け<sup>意</sup>非<sup>意</sup>し<sup>意</sup>鶴<sup>意</sup>ト<sup>意</sup>り<sup>意</sup>て<sup>意</sup>る<sup>意</sup>説<sup>意</sup>  
 音<sup>意</sup>ク<sup>意</sup>リ<sup>意</sup>訓<sup>意</sup>カ<sup>意</sup>ワ<sup>意</sup>ト<sup>意</sup>リ

△集<sup>意</sup>号<sup>意</sup>、説<sup>意</sup>前<sup>意</sup>、  
 冬<sup>意</sup>の<sup>意</sup>新<sup>意</sup>日<sup>意</sup>す<sup>意</sup>ん<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>ま<sup>意</sup>れ<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>し<sup>意</sup>め<sup>意</sup>て<sup>意</sup>

荷兮

け<sup>意</sup>服<sup>意</sup>の<sup>意</sup>白<sup>意</sup>代<sup>意</sup>燈<sup>意</sup>と<sup>意</sup>い<sup>意</sup>ふ<sup>意</sup>は<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>し<sup>意</sup>め<sup>意</sup>て<sup>意</sup>す<sup>意</sup>  
 公<sup>意</sup>箱<sup>意</sup>曰<sup>意</sup>く<sup>意</sup>は<sup>意</sup>服<sup>意</sup>を<sup>意</sup>さ<sup>意</sup>す<sup>意</sup>と<sup>意</sup>い<sup>意</sup>ふ<sup>意</sup>は<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>し<sup>意</sup>め<sup>意</sup>て<sup>意</sup>す<sup>意</sup>  
 上<sup>意</sup>の<sup>意</sup>白<sup>意</sup>代<sup>意</sup>燈<sup>意</sup>と<sup>意</sup>い<sup>意</sup>ふ<sup>意</sup>は<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>し<sup>意</sup>め<sup>意</sup>て<sup>意</sup>す<sup>意</sup>  
 衣<sup>意</sup>の<sup>意</sup>白<sup>意</sup>代<sup>意</sup>燈<sup>意</sup>と<sup>意</sup>い<sup>意</sup>ふ<sup>意</sup>は<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>し<sup>意</sup>め<sup>意</sup>て<sup>意</sup>す<sup>意</sup>

櫻<sup>意</sup>檜<sup>意</sup>山<sup>意</sup>家<sup>意</sup>の<sup>意</sup>侍<sup>意</sup>と<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>れ<sup>意</sup>る<sup>意</sup>侍<sup>意</sup>重<sup>意</sup>五<sup>意</sup>

新<sup>意</sup>日<sup>意</sup>の<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>し<sup>意</sup>め<sup>意</sup>て<sup>意</sup>す<sup>意</sup>は<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>し<sup>意</sup>め<sup>意</sup>て<sup>意</sup>す<sup>意</sup>  
 侍<sup>意</sup>の<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>し<sup>意</sup>め<sup>意</sup>て<sup>意</sup>す<sup>意</sup>は<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>し<sup>意</sup>め<sup>意</sup>て<sup>意</sup>す<sup>意</sup>

○新<sup>意</sup>二<sup>意</sup>を<sup>意</sup>  
 新<sup>意</sup>日<sup>意</sup>の<sup>意</sup>あ<sup>意</sup>ら<sup>意</sup>し<sup>意</sup>め<sup>意</sup>て<sup>意</sup>す<sup>意</sup>







△高の所をハカク高の  
形のみ  
後日本紀  
大正三年十月を  
始開美法園本園山道

△山橋を橋と云ふは  
山橋ハ三三三三  
目録曰杜舟ヲ書橋  
ト云々云々

△橋をひくは  
橋をひくは  
出石のりるらん

△橋をひくは  
橋をひくは  
出石のりるらん

△橋をひくは  
橋をひくは  
出石のりるらん

ナレハ一々庭中一の光景は  
而清口ナレハ秋の執事作  
如ク一射一々の存り  
是れは清の存り  
何れも  
山橋ハ三三三三  
目録曰杜舟ヲ書橋  
ト云々云々

橋ハ禁庭の守本多  
集を編む人を  
集を編む人を  
集を編む人を

△貞女此性の月  
赤月か  
二白一章

まじし衣  
羽衣

竹輿  
竹輿

内月を  
内月を

山間の美を  
山間の美を











追加

見たと難面しとら川聖歌

羽衣

△牛の牝子とてけりさあゆむを  
人まの面をうれとらうらうらあそんぬ牛を存面具一と  
羽衣とてけりさあゆむを  
雷音砲也  
口物也砲也  
あしものあゆむしけりさあゆむの  
アエし打トハ安良礼松原ト云こ松討じトゾ

松火一安あつれとら  
の松 荷子

△牛の昔一ひりん  
己の昔一ひりん  
昔大抵一ひりんを  
己の昔一ひりん

信濃諸村の通一牛とそく牛の牝子の牝子  
さうけい松木の昔一ひりんを  
いへる松木の昔一ひりんを  
松一ひりんを

とくさ新下らあはれとら  
せむ

とくさ新下らあはれとら  
せむ  
とくさ新下らあはれとら  
せむ

松火一安あつれとら  
の松 荷子

△信奉のへ  
松火一安あつれとら  
せむ

松火一安あつれとら  
せむ  
松火一安あつれとら  
せむ

福一蛤かかん 月 海 芭蕉

ひりりこ松火一安あつれとら  
せむ

物とソウヤリいせの昔一ひりんを  
より西上り之昔一ひりんを  
て美保の昔一ひりんを  
睡の地し〇あるよりとて  
そい表しとて



中村三田吉の著作に  
関する研究資料に  
近し



小泉  
政高為



